

友校蘇岐

(一)



論說

我校の使命

西哲曰へるあり凡ての實在は合理的のものなり合理的のものは發展すと幸に吾徒をして校運の發展を祝し併せて我校の使命を語らしめよ

最近確實の調査によるに我邦森林面積二千二百四十萬町歩にして全地積の六割に相當す之を歐米文明諸國に比するに其割合の大なる我邦を以て最となす蓋し地形の然らしむるところ宇内山岳重疊し農地となすに不便なればなり志賀博士の調査によれば全國地積の四割は絶對的林地にして其五分は關係的林地なりと故を以て今後農業の保護如何に周到に行はるゝとすると林地の變じて農地となる可きもの幾何もあらざる可し二千二百四十萬町歩の森林之を所有者によりて區別すれば國有四百五十萬御料八十萬公有五百五十萬社寺有二十萬私有千四百四十万にして内國有林御料林はば整理の緒に付きしと雖も公有林以下に至りては亂伐浪探慘として見るにたけず特に公有林を以て最となす

公有林は府縣有十五郡市有三町村有百九十一部落有七百九十一の割合にして實に公有林の十分の八は郡落有なり今内務省調査によれば

區分	町村有	部落有	計
所有區分	249,000	957,000	1,206,000
造林を地	(455,000)	(1,745,000)	(2,200,000)
造林能地	277,000	625,000	836,000
現林相を	(180,000)	(1,140,000)	(1,520,000)
もの	277,000	700,000	977,000
	(505,000)	(2,275,000)	(1,780,000)
計	737,000	2,282,000	3,019,000
	(1,340,000)	(4,160,000)	(5,500,000)

(備考) 括弧内の數字は臺帳面積にして括弧外の數字は之に相當する見込面積なり

即ち造林を要す可き地積二百二十萬町歩にして現に林相をなせる面積百七十八町歩合計三百九十八萬町歩の利用可能地あり今五十年を輪伐期となし地位を三等とすれば平均一ヶ年總生長量一億三千八百五十萬

明治四十三年十月二十五日印刷
明治四十三年十月二十七日發行
編纂兼發行者 (非賣品)
長野縣立校友會
木曾山林學校校友會
印刷者 鬼澤忠雄
全縣全市全番地
發行所 交文社
長野縣立校友會雜誌部
木曾山林學校校友會雜誌部

本誌目次
● 我校の使命 ● ホーレル氏土壤中の生物抄譯 ● シュニツヒ氏森林全書抄譯 ● 植物の養營に就て ● 植林の趣味 ● 杉の副産物 ● 八月林學士森林行政の論 ● 私有林の經濟的關係 ● 竹の美術工藝上の利用 ● 化香樹皮含有單寧に就て ● 文苑 ● 出鱈目録 ● マトヘン月明の曲 ● 其他 ● 和歌俳句 ● 學校近況藤卷君通信

尺べにして一尺べ一圓とすれば少くとも一億圓を産出可し豈驚く可き一大遺利にあらずや
且つや近時輿論を喚起したる水害豫防等國士保安の消極的方面より考ふるも公有林以下の整理は重要問題なり
當局風に見るところあり公有林統一公有林整理の二大題目を提起し地方長官以上を督勵して經營大につとむ幸に近時公有林以下施業の方針定まるもの漸く其數を加ふされど如何にせんこれが局に當るの技術者缺乏し其聲の大なるに比して其實の擧らざるの憾あり所詮事業の消長は之が局に當るの技術官にあり
國有林四百五十萬町歩御料林八十萬町歩の經營に如何に多數の技術官を要するかを察すれば公有林五百五十萬町歩の經營に如何に多數の技術官が缺乏せるかを察するに足る然り而して要するところの技術官は高遠の學理に精通せる學究にあらずして我程度の實業學校卒業生にして三四年國有林御料林に付き實地經驗を得たる程度の技術者なり之を先づ獨國の例によるも然り
近く遠近諸方より我校に要求し來るところに察するも亦然るを推す可し吾徒微力と雖

學術

ホルル氏土壤學土壤中の生物抄譯(續) 河野

發育の爲の酸素を必要とする細菌及び最後... 炭酸瓦斯を生産する化学的變化を致す...

その然れども鹽類殊に食鹽の如きもの多... 存在する時は却て有害にして又酸性反應...

シユリツヒ氏森林全書(續) 小松吉次郎譯... 第二の土壤温度 土壤中の温度は空氣温度...

Table with 2 columns: 樹林 (Tree types) and 温度 (Temperature) values.

Table with 4 columns: 唐楡林 (Tangerine grove), 春 (Spring), 夏 (Summer), 秋 (Autumn), 冬 (Winter), 年平均 (Annual average).

地上五呎 樹幹内 七分低しと... 樹幹は晝間周囲の氣温より冷かなれども夜...

第一節 濕氣及降雨に及す効用... 空氣は常に水蒸氣を保持す而して其水蒸氣...

の水蒸氣の量を保つ又空氣中の湿度は熱及... 氣壓により變化すること明かなれども森林...

植物の營養に就て 西澤 靜人... 抑も一般植物體の漸次生長して其の容積を...

高き所の森林は降雨に有力なる關係を有す... 外より多量の降雨ありとせり即ち森林内の...

於て蒸焼せば炭素の主成分なる木炭を生ずる。又空氣の流通善しき所に於て燒熱すれば其中の有機成分は燃へ去つて後に多少の灰燼を殘留すべし。此灰燼中に發見せらるる原素は、硫黄、磷、素、硅、素、鉄、素、カリウム、ナトリウム、カルシウム、マグネシウム、及び鐵の九原素に於て有機物の主成分なる炭素、酸素、水素及び窒素の四原素を加へて十三原素を含むもの。この十三原素は植物の發育生長に必要不可欠からざるものなれど、就中最も必要なるは、植素、硅素、及ナトリウム、の三原素を除く。他の十原素は若し此中の一原素若くは數原素を欠きたらんに、植物の發育を害し、遂に樹體の萎縮病的の徴候を示すを免れず。即ち水中培養法の實驗に依つて容易に証明することを得。此結果若し培養液中鐵を欠けは葉は固有の葉綠素を生ぜずして黃變し且つ畸形となることあり。又ヨロシウムを飲めば葉は綠色を呈するも植物の發育を不良ならしむることあり。

多の世人、殊に富豪家の如きは、所謂人生の快樂なるものは、酒色を措いて他に無きが如く、一も二も是を恣にせんとする傾向のあるのは、吾人國民の立場から見ると、實に惻然たらざるを得ない。酒色の快は一時の快にして永く是を樂しむことは出來ない、否却つて是が爲に或は我長生を傷けるものもあらう、またそれまでに至らずとも必ずや不快の之に伴ふ事は免れまい。

植林の趣味

羽田 龍尾

不快の感に打たれる者はあるまい、覺けず微笑を洩らすも無理ならぬ事ではないか。之を前者に比せんか、それこそ雪泥の差がある、要するに前者は肉體的にして程度も甚だ低いものである、然るに後者に至つては精神的にして、然かも永久的である。其名に聞いても、高尙なる感が湧いてくる。此處にまた是非共、諸氏に聞いて戴きたい。美談がある。前にもいつた通り多くの富豪が酒色に耽る今の世の中に、彼造船家として有名な菊三郎明翁が植林に興味を有つて、大に其事業を企て、既に各地に成功して居ることである。

また、其方針としては、自分の植むべき各地の林は向六十年間伐採すべからざるに依つて、その時價が百圓とすれば、六十年後に及んで各地の樹木の價といふものは、其れこそ何處圓といふ巨額に達するに相違ない、此位確實な殖法は他に無いとは翁の説で吾人も亦之を是とするものである、之を國利上から見て何と大したものではないか。

造林中杉程重寶のものは恐らく少なからうと思ふ。其樹の大なるものは各價の高價なる供給となるばかりでなく如何小き間伐木も皆夫々の需用があるしかのみならず、其葉は線香の原料となり梢は箸となり皮は屋根壁等となり其株は板となり細工物に使用する事が出来る等の事である。

杉の副産物

倉澤

八戸林學士森林行政論(續)三回 綠山生

第二節 森林管理員

森林管理員は責任を以て直接に業務實行の衝に當り林様の主腦又精神となるべき獨立機關にして同時に國家の森林警察權を實行すべき主要機關となる思ふに、管理員に對し最適切なる職名は往時我國有林行政に用ひられたる營林主事の稱號ならん現制に在ては山林屬(判任官)山林事務官補(奏任官)の中適當なる者を以て之を裁することとなり名づけて小林區署長と云ふ。帝室林に在ては帝室林野管理局技手並に同屬の中より管理員を任命し名づけて帝室林野管理局支應出張所長と云ふ。

- 一、原料生葉六百貫 六〇〇圓
- 一、常用人夫月六圓のもの四人 二八八圓
- 一、臨時人夫二十五錢の者五人 七五圓
- 計 九六三圓
- 一、製粉代(十貫五百目一俵) 一二三圓
- 一、差引純益金 三〇〇圓

れ従來の林區長制も次第に同制に改められつゝあるを見る、林區長制は以外なる小聯邦の國有林に用ひられ殊に獨逸諸國の大私有林に在ては最適當なる制度として之を採用す、此兩制の應用に就ては森林所有の大小林業周約の程度に關し又當事者教育の程度如何を顧み酌する所あるを要す。管理員の職務たる頗多端にして一人の力にして之を處辨し能はざるを通常とするを以て其技術上の業務を補助せしむる爲め或は文書的事務を掌らしむる爲め其他森林檢閱路系計書工場の如き特別業務の實行に關しては常時又は臨時の助手候補を要するなり而して候補の多くは管理員と同等教育を受けたる後進生を撰み他日獨立の管理員となるべき途中にあるものにして此補助業務は堪能なる管理員を育成する所の最良なる豫備學校なりと謂ふべし。

極めて小なる面積即數町歩以下の森林を所有する者は所有主自身事務の計畫實行をなすは言を待たざる所にして稍大なる面積即數十町歩乃至數百丁歩の森林を有する者に在ては一人の中等專門教育を受けたる者を採用し重要問題に限り森林所在地附近の國有林其他大森林を管理せる經驗學識ある管理員に就き其協力を仰ぎて之を決定することあり。

拔萃

私有林の經濟的關係

(小田博士森林政策拔萃)
森林が私有物件中占むる處の經濟的位置關係は其所有の大小によりて大に異なり、大森林所有の場合には森林は地主の農地其他の土地所有に關係なく、獨立の財産及び産業の目的物をなす即森林は安全なる資本

投入の場所として用をなし且地主に年々殆ど同額の収入を與ふたごへ林業の収利は他の企業に比して僅少なりと雖も資本投入の安全なること年々収利の均同なること財産管理の簡便なること其他森林の價格及び收入が年々増殖すること等の事由存するを以てよく其缺點を補償する所なり。

人若し土地を所有して之に多額の財産を安固に集積せしめんとせば必ず先づ指を林業に屈せざる可からず何となれば林業は比較的の面積上に多大なる資本を蓄積し得る事業なればなり然るに農業に資本を投入し有利ならしむるには地積上自ら一定の限界ありて林業の如く大なる能はす此限界を超過したる大地積にありては農業上必要なる作業設備等の關係よりして地主の管理監督をして全く不可能ならしむる事情あり加ふるに農業は投入資本を可成的有利に回轉せんとせば地主其人に關する處大なりと難も林業にありては之に反し地主の干渉協力に要すること極めて少く比較的小数の役員を以てよく幾百萬の財産を安全に管理し得る處なり。

以上は大森林所有の場合なりと雖も小森林所有に至ては其關係大に異なるものあり之れにありては森林は主として貯蓄金庫若くは備荒資金の用をなし地主は之れによりて不時の凶作を救済し或は非常出資を支援し或は又已の信用を高むる等の利益を得べし森林若し過小にして充分之等の任務を盡さしめ能はずとせば家業上並に農業上に利用して便益あり即木材養成の如きは第二位に置き時々燃料若くは農業用材を採取するに止め専ら落葉下草の利用を以て其主眼とするにあり殊に地味瘠悪なる地方に於ては甚必要を感ずる最も大なり而して此の如く副産物利用が林業の普通目的たる木材養成よりも

竹の美術工藝上の利用法

(本多博士造林學各論拔萃)

竹材は木材と異り内部が空虚で一種の長管になつて居て柔軟性弾力性彎曲性があり且縦割性があつて薄片に剥ぎ得る特性を有するから種々の美術的細工をする上に於て居る、今其應用法を述べて見よう。

竹に藍色を附する法、苦竹を乾燥して適當の長さにて切り等を以て粘土の泥漿を振り掛け火にて焦せば泥漿は乾固して燃焼を妨げ暗褐色に變ずる、又泥漿中に硝酸若くは硫酸を混する時は薬品の部分は殊更に黒点が出来る。

擬煤竹を製する法、煤竹は數十年間民家の屋根裏で燻らされて始めて出来るもので之を得るのは程遠いことである、之を擬製するには苦竹又は淡竹の表皮を小刀で剥ぎ取り木賊にて磨いて平滑に爲し然る後に強硝酸を塗つて少し温むるのである斯くして煤色となつたのを布で擦り光澤を附ければ譯なく煤竹が得られる。

煤色の斑文を附する法、竹面に蠟を塗り之に篋で模様を畫き硝酸を塗つて燒き然る後に蠟を拭ひ去るのである。

竹に各種の模様を畫く法、硝酸銀五匁とアンモニア七匁を混じり、別にアラビヤゴム粉五匁、結晶炭酸曹達五匁、水十五匁を混じつたものを前の液と混和し之を煮して黒色を呈するを俟つて黒色瓶に貯へ置き此液を以て竹面に各種の模様を畫き日光に一時間程晒して然る後に水に洗ひ布で能く拭ふのである。

竹を白色にする法、硫黄にて燻蒸するか又は亞硫酸液にて洗へば宜しい。

竹を染むる法、アニリン色料を水に解かして之を温め此中に竹を數分間浸し置くのである、然し之は摩擦すれば消滅し易い虞はある。

竹を柔軟にする法、竹の表皮を削り肉を殺ぎ薄片となし之を蕎麥稈の灰汁にて數時間煮て後に之を隨意の形に押し曲げて茶盆などに作り燒鑊を以て之を止むるので、此他竹を蒸し或は油を附けて蒸るか又は單に生竹を熱しても多少柔軟にすることが出来る、通例椅子篋筒等に作るには單に火の上で温め之を曲げるものである。

化香樹皮含有單寧に就きて

(山林公報拔萃)

單寧材料として解樹皮は費用せらるゝものと雖も温帯所産の樹種なるを以て出陰山陽に存するものは夙に關西の靛皮家に使用し盡され今や其材料を東北地方及北海道に求めざるを以て關西の靛皮家は止むを得ず化香樹根皮及椎樹皮及罌子桐樹皮を其附近に求め居れり然も此三樹皮のみならず靛皮も次第に飲乏するを以て其材料を海外に求むるに至れり之れ林業家の大に考慮すべき點なりとす蓋し靛皮事業は歳を追ふて盛大に赴くに因り靛皮用單寧材料を供給するがために餘りある林地を利用して靛皮備林を經

營するは林業上急務なりとす、化香樹は暖帯所産の林木にして四國九州の南部に産し沃土にありては生長迅速なり其根皮を以て革を製する時は赤色を帯ふるに因り歐米にては賞せざるも單寧の含有量多く解樹皮に比し二倍の靛皮力を有するに因り關西地方にては常用とす材軟柔にして下駄材燻干軸木も適し根皮は林輪を重ぬるも粗皮を牛する事少しと云ふ依て靛皮材料としての伐期は二種に分るべし即ち一は伐期を短くして根株を發掘し易からしむる事一は伐期を長くして其材を利用して以て根株の發掘費を補ふ事なり、化香樹根皮は靛皮材料として使用せらるゝものなるが故に單寧の含有量多きものなるを以て優れりとするを得ず換言すれば靛皮の色澤に影響を及ぼすべき夾雜物につきても考へを要す其浸出液の著色甚しからざるは或は樹齡の若き爲めにあらざるなきか然らば化香樹根皮は幼樹より採集する時含有單寧量を減せざるのみならず著色甚しからざるに因り靛皮材料として適目すべきものたるべし、化香樹根皮は含有單寧量多きものを以て皮を製する時は赤色を呈するに因り費用せられす然、幼樹の根皮の浸出液は著色甚しからず且含有單寧量多きにより採集年齢により好箇の單寧材料たるべし又根皮採集は樹齡の増すに困難となり且採集量比較的大なるを得ず故に單寧材料として化香樹を造林するには更新期を短くするを可なりとせん。

文苑

出鱈目錄(十一月二十一日)

竹川生
信州と曰へば直に連想するのは山である御嶽山である又信濃川である川中嶋である此

等の山川固より崇高であり偉大である併し此外に猶ほ更に崇高なる偉大なる或ものを開いて居る其は即ち文章と辯説とである信州は由來文章辯説に秀で居るといふことである。

辯説に於ては夙に其の然るを首肯して居る自分の知己の誰彼を數へても皆うふである中には口から先きに産れたなご悪口さるゝ者もある概して信濃人は辯説に長して居ることは名實相伴ふものだと自分は推稱する文章に至つては是まで知らなかつた寡聞の致す所福嶋に來るまでは知らなかつた信州出身の藤村君の文章家なる位は知つて居た併し通して文章の才あることは知らなかつた之感したのには實際信州に來てからである新聞などにても同じ田舎の新聞にして比較的上手に大膽に面白く執筆してあると思ふ又一寸書くものにして中々文才に富めることを証明して居ると思ふ。

山林學校は(福島の)矢張此兩美點を具備して居ると思ふ演説會などにも其デニスチエアの上手なことを言ひ廻はしうまいことは確かである小生等も中學時代高等學校時代には校内で編輯する嬌々社雜誌龍南會雜誌などに投書したり又演説會には演説したる併し文章は兎に角演説となれば常に閉口して居た寧ろ義務的に行つてのけたのである草稿なしの演説では随分冷汗を流したものだ斯んなに嫌いならば止めれば良いのに大學に入つてからも演説は意思を發表する唯一の武器である此の武器は常に研磨せねばならぬといふ主張から又々御苦勞にも同期生相集まりて演説會を始めた最も之は三年になつてから半年ばかりであつたと思ふ自家撞着も此位の程度まで進めば結構で

ある其處で演説をやることになつた初めの内より立派なオレターを氣取つて腹案も作つて演壇に立つたが是も遂に蛇尾に終つた後に抽籤を以て當番を定むるに至つた流石のオレターも此に至つて最初の元氣は何處にやら詮方なく演壇に立つて草々に失敬するといふ有様斯の如き有様で遂に切なしに終りを告げた併し小生に於ては演説の必要を認めて居るのは終始一貫てある併し何分にも性に合はぬと見ゆる君子は言に訥にして行に敏なりといふことかあるが小生も半ばは君子の資格を具備して居ると思ふ

文章も當校生徒諸君は中々上手なところがあると思ふ併し試験の答案に付いて考ふれば(小生の關係ある範圍にて)餘り感心せぬ是は無理もないことであらふ文章として書く時の意氣込みと答案を書く時の意氣込みとは同じ意氣でも出所が違ふからである依つて答案を以て直に諸君の文才を斷定することは決して致さぬ却つて内々感心して居る点もある其れは校友會雜誌などを散見しても左様に感ずる

文章も演説も初めから和尙を氣取るから上手にならぬものである初めは是非とも味憎をも擧げなければならぬ自分は味憎擧小僧だと思ふて居なければならぬ然るときは決してやり損じても耻しくもなんともない併し腹の内には自分は終に大和尙になるのだと云ふ向上心を常に蓄へて居なければならぬ校友會の雜誌も月刊となつたから文章を練るには誠に都合となつた此期を逸せず臆面なく書かれたらよからふと思ふ

小生は演説も文章も下手である夫れに執筆したのは強ひられた結果である畢竟試験の答案を出すやうなものだ諸君か答案は拙たか文章は上手といふなら小生も其の通り

僕の棚卸し 盲蛇 生

僕元來争ふことを嫌ふ彼の睡眠の怨を以て額に青筋を張り口角泡を飛ばして力味返る人の氣が知れざるなり權利なんか蹂躪せらるることは糸爪の皮とも思はず名譽なんか毀損せらるることは尻の精とも思はざるなり或は侮辱を加ふるものあれば蛙の面に水を以て之を防ぎ愚弄を試むるものあれば豆腐に鏝を以て之に應ず其他罵詈謗恐喝威嚇何でも御座れ僕亦鞭に釘あり馬耳東風あり護身の物の豊富充實對手をして呆然自失せしむるの奇術を有するに至りては千里眼千鶴も三舎を避くべく濱口熊嶽徒跣で逃ぐへしなにも恐れぬに足らんやだ

僕又邪推なるものを嫌ふ彼の彗星と地球との衝突を苦しめ太陽の燒盡を恐るるものはまだしも世に或は神經過敏なるものあり未だ目にも見えず耳にも聞えざる事件に氣遣ひあふかこうかと揣摩憶測を逞ふし甚しきは人の心内にまで探りを入れんと試むるものあり豈に男らしからざる心底ならずや其探るもの御苦勞探らるるもの不愉快果して如何此の如きは一步々々自他の中間に障壁を高ふし管に平和を破るのみならず遂には互に相反目疾視するの己むなきに至るや必せり僕亦決してかざる愚に倣はざるなり僕の事を慮するや豫め計畫すること極めて少く何でも彼でもブツツカリ主義で當座有合せの分別を以て間に合せるなり故を以て往々錯誤もあれば失敗もある而して其失敗其錯誤寧ろ愛嬌なることも嫌悪を買ふが如きことあらざるへしと已惚れて居る僕又餘り金錢の貴きを知らざるなり彼の文久一文の爲に區裁判から大審院まで経廻る

ベトーベン月明の曲

人の根性が解らざるなり然れども呉れる人あらば之を貴ぶに躊躇せず唯苦辛慘憺自ら求めて金持たらんと欲せしことは五十餘年來一度もなし換言せば棚から落ちる牡丹餅は食ふべし自稼いで作るパンは忌やと云ふに外ならず故を以て年が年中他人の金ならでは囊中に入りたる例なければ餘り苦痛とも感ぜざるなりさはいへ僕とても地球上に蠢めく一種の動物だながら憂き世の風の吹き廻はしに逢はざるべき時には鼻の米櫃の底を叩いて鬱々たるに閉口することもある子供の嗜着の強請に首を傾ることもある債鬼の呵責に恐縮することもないではない斯る時には大に悄然て自ら省み五十歩も百歩も常に人後に立ちて歩いて居るのも呑氣の天罰と意馬に鞭を奮勵一番することもあつたが持つて生れた病は棄つるに惜しく喉元過ぐれば熱さを忘れいつしか戻る以前の氣まぐれ

こんな調子でヌラリグラリと飄飄然に日を送る僕の境涯不平もなければ怨嗟もなく波瀾もなければ頓挫もない平々凡々息災延命を藉らでも時節が來れば極毒藥風情の力何れなりとも閻魔の指圖これ亦御意に背かぬが僕の本領

乞ふ世の所謂苦勞症なるもの心の平和を得んと欲せば弓を弛べ兜を脱して吾軍門に降し庶幾は額の青筋をして細からしめ中間の障壁をして卑からしめん穴賢

月明かなる冬のある夕方、私はベ君と散歩して何所かで夕食を共にしようと思つて彼を誘ひ出した

不意に蠟燭の火が風にゆれてちらちらして消えたベ君は止めた私は窓の障子をあけて一流の月光を導き入れた

室は前のやうに明かくなつた然し彼の感興は此出來事によりて破れてしまつたやうであつた頭を胸のあたりに垂れ手を膝の上を置いて瞑想にふけつた

靴作りは立つて恭しく近より「たいあなはどなた様でござりまするか」と低き聲で尋ねた

「君は莞爾として彼の作乙の曲の初めの所をひいた

驚喜の聲が二人の口から洩れて「うれではあなたかベトーベンさんでござりまするか」と喜びの余り泣いて二人は彼の手にキッスした

彼はかへらうとして立ち上つたが私共無理やりに止めて今一度ごたのんだ

月は皎々としてさし込みベ君の大なる頭と身体とを照した

私は月の光に對して一曲をひきました

「深く思ひに沈みつゝ空と星とを打ち仰ぎ彼は云つた

手が琴鍵にふれると悲哀の調があたかも月光の靜かなる流が黒い地球を包むやうに靜かに樂器を包むた

やがて天人の芝生にをざるやうな寃々しき一節となりしまいには其嗜めたる翼に私共をのせて行くやうな息もつけないやうな打ちぬるふた調了つた

「さよなら」とベ君は腰かけを押しつけて戸口に立つた

「さよなら、亦來てくだされませ」と彼等は一聲にたのんだ彼はふりむいて娘の顔をつつくど打ちまもつて急いで云ふた

「よしよし、亦くるよ、すぐ亦くるよ」二人は黙して送つたが云はぬは云ふにいやまざる

急に立ち止つた

「ハテ何の曲だらう、ア、僕の作つた乙の曲だ、すてきにうまくひくね」と彼は感心する、音のするのはいささか賤い住家であつた私共は戸外に立つて聴いて居つた、奏者は續けて弾いたが暫く経つと急に止めて泣き出した

「これからささひけないよ、美しい曲ネ、とても私などの力では正しく弾けなくてよ、嗚呼々々コーロンの音樂會にごうかして行きたいネ」

「姉さんは亦あんなこと、たつしやるよ、家賃さへ拂へないじやありませんか」

「だがね一生に一度でいいからよい音樂が聴きたくてよ」

「君は私の方を見て『這入らう』と云ひだした『這入るなせ』と私は驚いて問うた

「ひいてさかしてやりたからさ」と彼は激した調子で云ふ

「音樂に對する感情天才理解力をもつてをる、さかしてやりたい彼女は理解するよ」と彼はうわ言のやうに云つて私の止めるのもきかすに戸を開けて這入つた

家の中には一人の青白い顔の青年が靴を作りながら机の傍に腰をかけてをる其傍に古風な琴に悲げによりかかつて一人の若き娘がをつた少し前の方にかかんで房々とした髪が顔の上にかぶさつてをる

二人とも粗末な着物をきてをるがさつぱりとしてをる私共が這入ると驚いて私共の方を見た

御免ください私は音樂をきいて這入りたくなつて這入りました私は音樂師ですとベ君挨拶した

娘は顔を赤くし靴作りはひつとしましたやうであつた

「私共は御二人の御話を立きよしまし

た君等いや御二人は音樂をききたいとをつしやる私がさかして上げましよう」

「有がたう然し私共の琴は至つて御粗末です、うして譜をもちあはしませぬ」と靴なほしが云つた

「譜なしですすかうれではござうして」と云ひかけたが娘と顔見合せて娘が盲目であるのに氣が付き顔赤くして

「失敬々々ごんごんごん申しました御目が御悪いのでしたねうれでは耳で御をばへでしたか」左様でござりまするか」

「今立きましてをりましたら音樂會には度々行かないと云ふことでありましたか何所で御きこになりましたか」

「御隣の御嬢さんの御ひきになるのをよくききました夏の夕方御嬢さんは窓をあけてをられますから私は戸外で立つてきいてをりました」

「恥しううに答へますから君も黙して靜に樂器の前にすわりました

「彼がひき出すとすぐ私は必ず彼が今夜はうまくひくだらうと直覺しました其夜は彼は嵩高でありましてうして私の直覺は誤りませんでした

私は彼と永く交りましたがこの旨の娘と其弟の爲めにひいてやつたときはどうまくひいたのを知りませぬ

彼は興奮してをりました其指が樂鍵にふれ始めるとその音は益々妙にひびいた

二人は驚喜して黙した弟は仕事をやめ姉は頭を少し前にかかめ両手でひしと胸を押へ

「妙音を妨げぬよう希望するものよ、うであつた

私共は奇妙な夢を見てをるやうでいつまで覺めぬやうに希望しました

不意に蠟燭の火が風にゆれてちらちらして消えたベ君は止めた私は窓の障子をあけて一流の月光を導き入れた

室は前のやうに明かくなつた然し彼の感興は此出來事によりて破れてしまつたやうであつた頭を胸のあたりに垂れ手を膝の上を置いて瞑想にふけつた

靴作りは立つて恭しく近より「たいあなはどなた様でござりまするか」と低き聲で尋ねた

「君は莞爾として彼の作乙の曲の初めの所をひいた

驚喜の聲が二人の口から洩れて「うれではあなたかベトーベンさんでござりまするか」と喜びの余り泣いて二人は彼の手にキッスした

彼はかへらうとして立ち上つたが私共無理やりに止めて今一度ごたのんだ

月は皎々としてさし込みベ君の大なる頭と身体とを照した

私は月の光に對して一曲をひきました

「深く思ひに沈みつゝ空と星とを打ち仰ぎ彼は云つた

手が琴鍵にふれると悲哀の調があたかも月光の靜かなる流が黒い地球を包むやうに靜かに樂器を包むた

やがて天人の芝生にをざるやうな寃々しき一節となりしまいには其嗜めたる翼に私共をのせて行くやうな息もつけないやうな打ちぬるふた調了つた

「さよなら」とベ君は腰かけを押しつけて戸口に立つた

「さよなら、亦來てくだされませ」と彼等は一聲にたのんだ彼はふりむいて娘の顔をつつくど打ちまもつて急いで云ふた

「よしよし、亦くるよ、すぐ亦くるよ」二人は黙して送つたが云はぬは云ふにいやまざる

ように思はれた私共が見えすきこえずなるまで二人は戶外で立つて見送つてをった二「いろいろかへらう 感興の去らぬ内にあの月光の曲を書いてをこう」

○次に吾が國の武士道の起源を尋ねて見るに一刀流の勇士も柳生流の武士も畫尙暗き森林内に於て沈黙考して自己を見出すと努めたからだ

きくの花さくにつけてもしのふなありしむかしのきかかひ 二年 福田生

見渡す限り萬頃の荒蕪たる大平原立木など一本も見當ない所に自分一人此頃敢はつたばかりの三角植樹法でせつせと造林して居ると何所からともなく忽然と恐ろしげな無頼漢があらわれ後から後から夫れを引き抜いて行く。癪に障つてこゝに喧嘩をたつ

○前論より推して見ると周囲の森林が人生に及ぼす影響のいかに大なるかを知る事が出来る。樹木鬱蒼、蘇苔青々、細泉の涓々たる邊に入る高尙なる人格を養成する魅力がある、何處までも偉大な力が

山ひびく細谷川を色どりて 紅もゆる小つゝの花 音信かきし花の行へは

○純粹清潔の空氣は諸鳥の歌ふ森林にある又古語に「秀麗の地は偉人をたす」と云ふ事がある、ニッ共未來永久動かすべからざる真理である

和歌俳句 安井正夫 寄道風 我木曾谷は春より秋にわたり露の聲たゆる時

○創立十周年記念大運動會 十月三十日は如何なる吉日ぞ畏くも我輩聖文武なる天皇陛下の親しく教育勅語を下し給ひし日にあらすや我校は此日をトし創立十周年を祝せ

通信

學校近況 十月三十日は如何なる吉日ぞ畏くも我輩聖文武なる天皇陛下の親しく教育勅語を下し給ひし日にあらすや我校は此日をトし創立十周年を祝せ

んが爲紀念大運動會を校庭に開けり藤田生の記事其概略を見るべきか

○創立記念大夜會 晝間の運動の疲を慰めもあへず午後六時半より餘興として一大夜會は開かれたり今家高生の記事によりて其概況を傳へん

○演習參觀旅行 十一月六日より九日まで四日間第三學年一年生一同は北信の野に開かれたる機動演習參觀旅行を爲せり徳武生の記事左の如し

三十日夜來の雨は名残なく霽れて心地よきブリウスカイ秋氣正に清く満山の紅葉花より紅なり 午前九時雨天体操場に於て紀念祝賀式を舉行す校長開會を宣し式辭を述べ

○古物展覽會 運動會の餘興として階上教室に開かれたる該會は頗る奇抜滑稽を極めしが就中大織冠鎌足公の大櫛(大和國多武峰談山神社出品)秦の始皇が不死の藥(臺灣總督府出品)青木昆陽の南洋より取寄せし

中ても手品の奇妙なるには見物人等じく舌を捲き假裝行列の滑稽なる劍舞詩吟の勇壯活潑なる活人畫の勇壯美麗なる尙又狂言安宅の關は十數人各得意とする所の藝を演じ觀者をして飽かしめず悉く其特色を發揮し

の九阜に叫はんとするあり其下一大靈龜の萬代の祥瑞を壽ぐあり左には天に輝ゆる日韓合邦紀念碑あり校舎の前には紅白緑種々の花輪を以て飾られ玄關近く賞品部あり左方に新聞社賣店あり賣店の上を仰げば之を山林に住むてふ大天狗場内を睥睨する形相

○創立記念大夜會 晝間の運動の疲を慰めもあへず午後六時半より餘興として一大夜會は開かれたり今家高生の記事によりて其概況を傳へん

○演習參觀旅行 十一月六日より九日まで四日間第三學年一年生一同は北信の野に開かれたる機動演習參觀旅行を爲せり徳武生の記事左の如し

敵狀偵察のため頻發せる斥候の出入と東方御厩村方面に當りて屢銃聲を聞きたるのみ去る程に午後二時頃ともなれば南軍の砲兵陣地なる會及荒屋方面色めくと見る間に大戦闘は開始せられたり此時北軍の主力は丹波島附近北國街道の東方地區より南軍が死守せる散兵濠の前面に押し寄せたるなり砲聲は殷々として天地に轟き叫聲は山谷を震はしめ凄絶慘絶の狀を極む、交戦三十分にして機や熟しけん南軍の將士一時に劍を振つて起つ吶喊の聲山河を轟かし田となく桑畑となく溝と云はず踴躍奮進其鋒衝るべからず、さすがの強敵北軍も南軍が逆襲の舉に敵し難かりけん動搖めき立ちければ勝ちに乗りたる南軍突撃更に急を加へ過ぐる處砂塵濛々烟霧の如し殊に笹井村附近に於ける歩兵五十聯隊の追撃隊の猛進に至りては只壯絶悽絶坤軸を卷ひて來るの思あらしむ、かくて丹波嶋の南方犀川右岸に出づ、此時北軍の橋梁渡渉を撃て腦ますこと甚だしかくして南軍追撃を逞し芹田、青木村、安茂里の各村を占領し敵を北國街道遠く擊退して露營す時に弦月淡くかゝり白霧轉々繁し幾千の猛士草枕の假寐に結ぶ夢は如何なりけん、丹波の橋邊、幾百の死屍北軍總統恨は永へに犀の流れと盡きざらん嗚呼！此夜聯隊本部の指揮によりて長野に宿營八日晴。午前五時三十分宿營發上水内郡若槻村東篠小學校附近に於て觀戰せり南軍は尙北軍を追撃して大打撃を加へんとはするなり此日の編成は五十聯隊と砲兵一大隊工兵一中隊とは前衛となりて北國街道を前進し砲兵第一大隊工兵第十三大隊は右翼衛となり他の諸隊は皆本隊なり此日朝來濃霧立込めて両軍の進退動搖知るに由なし、觀戰客は山をなすと雖も其遠近に一二の銃聲を聞くのみ徒に焦れ居るの外

如何ともする能はず午前八時霧散すれば北軍は東條高地より西條山一面に陣地を構へ寄せんとするものあらば鏖殺せん勢頗る地の利を占むるものゝ如かりき南軍の前衛砲兵は三輪村宇木神社附近に根據を据ゑたり、去る程に先づ南軍前衛の巨砲轟々として山谷を震はしむれば續て押鐘近傍なる本隊これに和す北軍の應戰亦頗るなり此間に南軍の銃聲一時に發す銃聲、砲聲、叫聲軍馬の嘶劍聲の響段々露々鬼神も爲に泣く誠にして吾之れが形容の辭を知らず彈丸雨下する中を勇を鼓して前進又前進せる南軍五十八聯隊は遂に西條山を占領すれば後れじと南軍一同席巻して北軍に突撃す閃雷の如し兩軍の死傷夥しく無慘の狀見るべからず劍擊の響甜なる頃休戰の喇叭響き渡りて演習は終了を告げたり、時に十時に垂んとすかくて豫定の參觀を終りたれば十一時三十分吉田停車場上り列車に投じ夕頃松本に着一泊して九日我等は此行によりてあらゆる困難と苦痛に堪ゆるの氣性を養ひ豪毅壯大の氣を練り因て一死報國の赤誠を涵養する資を得たり殊に軍隊と行を等しくして疲勞の色あるものを見ざりしは私かに吾人の誇として喜ぶ所なり

上は困を解き直に泥田を作りて浸し其後適宜に假植致居候短期の場合には省畧すること有之候植付は五尺平方植にして先に案内堀とて山地の地勢上に鑑み適宜に種繩を張り其を基木として苗間距離を附せる三四十間の繩を移動して列間距離を定め其苗間の印に當る点に子供人夫をして点を線にて附けしむる之を俗に点附と申し植付は一人にて「カマス」に苗木を入れ自ら掘り自ら植へ平均一日四百乃至三百七十本位進行いたし候之れは昨年の實行に準じたるものに有之候其他に小運搬とて假植地より植付所迄の運搬夫有之候人夫の種類は
 1、人夫取締 監督員の指揮を傳達其他
 2、夫間に於ける一切の取つき
 3、労働夫 植付地拵小運搬刈拂
 4、雜役
 5、備考 人夫取締は二十五人以上四十人以下位に一人を置く

(一)岩手地方造林事業之概況 藤卷壽一
 季節春は四月十六日頃より五月廿日頃迄植栽樹種は扁拍落葉松赤杉稀には「ケヤキ」等に御座候仕事は地拵植付夏期刈拂疎伐等に於て特別經營に屬する面積多く有之候地にして小柴刈及雜立木の皮剝位にして特別經營にありては非常に容易に候次に苗木は前年迄は茨城縣地方より供給せるが本年より地元産採用の方針に有之苗木地に於ける

(二)全地方森林被害は主として人為にして殊に造林地火災之れば全地方は有名の南部馬の産地なるか爲に盛に行はるゝ山中火入の習慣と國有林の造林地増加の爲め秣場の採取面積減少の地方生産等と衝突の結果故意になすものに候其他は少々小盜伐害蟲黃金虫の落葉松の葉を食ふ事有之候も被害僅少に御座候依て別段驅除等致さず候
 杉扁柏等の植栽後七八年を経て盛に生育せるが何等異狀なく塊狀に枯死せるもの發見稍頭より紅褐色に變じ漸時下時に及ばし候も原因不明にして杉には傳染性を有する如く見ゆ申候之れは多分微菌かと疑はれ候而して根元の阿皮部に白色のカビ狀のもの附着いたし居り候
 植栽後二三年の扁柏主として西面の乾燥の易き所に根元に外皮より次第に内部に裂目を生じ生育遲緩となるが又は枯死する者有之候之は日燒に罹りしものと考へられ候

藤卷壽一君より通信(續き)